

は日本から機材供与や専門家派遣が行われている。北部のイエンバイ省にて NGO「セーブザチルドレンジャパン」が着手した、母子保健も視野に含む子供の栄養改善プロジェクトも注目を集めている。中北部ゲアン省で家族計画国際協力財団 (JOICFP) によって実施されているリプロダクティブヘルス向上のためのプロジェクトは、人口分野での援助として評価が高く、今年度よりフェーズ2へ移行し協力が継続されているが、日程上視察することはできなかった。人口・保健以外の分野では、草の根無償援助によって建設された小学校など日本の援助の成果を見る機会を得た。

社人研はここ数年間だけでも「東南アジアにおける持続可能な都市化、女性の地位、宗教」をはじめさまざまなタイプの研究プロジェクトを途上国で実施している。これらのプロジェクトでは社人研のもつ技術が活用されることで、途上国の人口問題の現状が明らかになり、解決に役立つだけでなく、途上国のカウンターパートの研究者や実務担当者に知識やノウハウが移転されることになる。今後も途上国の人々に役に立ち、また、国際社会での日本の評価を高めるためにも、人口分野での援助事業に率先して関与していくことが重要であろう。
(小松隆一記)

国際人口学会 少子化研究班セミナー 「少子化に関する国際的視座：動向・理論・政策」

2001年3月21日(水)～23日(金) 東京(お台場)にて、国際人口学会セミナー「少子化に関する国際的視座：動向・理論・政策」が開催された。

国際人口学会では、4年に一度の全体会議の他に、科学会議、研究班といった組織によって、人口に関する個別テーマを扱った共同研究活動が行われている。今回のセミナーは、少子化班(委員長 Peter McDonald 氏)による呼びかけによるものであり、国立社会保障・人口問題研究所の共催によって実現した。報告論文は依頼と公募の二方法で集められ、全部で21報告、参加者は25名であった。日本からの参加者は阿藤誠、廣嶋清志、高橋重郷、小島宏の各氏と筆者の5名であった。

なお、最終日23日の午後には「少子化に関する国際シンポジウム」と題された公開討論会が開催された(こども未来財団、少子化への対応を推進する国民会議、国際人口学会主催、国立社会保障・人口問題研究所、読売新聞社後援)。阿藤氏の司会のもと、高橋氏(日本)、ロンセン氏(ノルウェー)、コールマン氏(イギリス)、コーラー氏(ドイツ)、トゥルモン氏(フランス)、パロンバ氏(イタリア)の各氏が、それぞれの地域の少子化の現状、家族政策に関する取り組み等についての基調報告を行い、それを踏まえて、会場からの質問を交えながら活発な討論が行われた。

プログラムは次の通り。

21日(水)

Session 1: 座長: Makoto Atoh

Tomas Frejka and Gerard Calot

Cohort childbearing age patterns in low-fertility countries in the late 20th century: Is the postponement of births an inherent element?

Chris Wilson

Implications of global demographic convergence for fertility theory

Session 2: 座長: Ron Lesthaeghe

Peter McDonald

Theory pertaining to low fertility
Nancy Folbre
The distribution of the costs of children

Session 3: 座長: Tomas Frejka

Hans-Peter Kohler and Jose Antonio Ortega

Period parity progression measures with continued fertility postponement: A new look at the implications of delayed childbearing for cohort fertility

Ron Lesthaeghe

Postponement and recuperation: Recent fertility trends and forecasts in six Western European countries

Session 4: 座長: Nancy Folbre

Marit Ronsen

Fertility and family policy in Norway; Is there a connection?

Laurent Toulemon

Why fertility is not so low in France

22日 (木)

Session 5: 座長: Marit Ronsen

Rossella Palomba

Postponement of family formation in Italy, within the Southern European context

Gianpiero Dalla Zuanna, Alessandra De Rose, and Filomena Racioppi

Low fertility and scarce diffusion of modern contraception in Italy: a paradox to interpret

Session 6: 座長: Hans-Peter Kohler

Dimiter Philipov

Low fertility in Central and Eastern Europe: Culture or economy?

Alexandre Avdeev

The extent of the fertility decline in Russia: Is the one-child family here to stay?

Session 7: 座長: Laurent Toulemon

Roderic Beaujot and Alain Belanger

Perspectives on below replacement fertility in Canada: Trends, desires, and accommodations

Rebecca Kippen

Trends in age- and parity-specific fertility in Australia

Session 8: 座長: Vasantha Kandiah

Kiyosi Hiroshima

Decomposing recent fertility decline: How have nuptiality and marital fertility affected it in Japan?

Shigesato Takahashi

Demographic investigation of the process of declining fertility in Japan

Hiroshi Kojima

Attitudes towards low fertility and family policy in Japan

Miho Iwasawa

Partnership transition in contemporary Japan: Prevalence of childless non-cohabiting couples

23日 (金)

Session 9: 座長: Chris Wilson

Makato Atoh, Vasantha Kandiah and Serguey Ivanov

The second demographic transition in Asia: Is it similar to or different from that in Western Europe?

Zhongwei Zhao

Low fertility in Urban China

Mohammad Jalal Abbasi-Shavazi

Below replacement-level fertility in Iran: progress and prospects

Session 10: 座長: Peter McDonald

David Coleman

Discussion and synthesis

(岩澤美帆記)

第66回アメリカ人口学会年次大会

アメリカ人口学会 (Population Association of America) の2001年大会が3月29日から31日までワシントン, D.C. にて開催され、本研究所から佐藤隆三郎、岩澤美帆、小松隆一が参加した。リプロダクティブヘルスに関するポスターセッションで、佐藤・岩澤は“Contraceptive use in Japan: 1987-1997”を発表した。

今年の年次大会では高齢化や少子化、人口の将来推計など政策上重要なテーマの研究が150ほどに分かれた口頭発表のセッションや6種類に分類されたポスターセッションを中心に多数発表された。将来推計に関するセッションではLee and Carterの方法を出生率に応用した研究 (Li and Tuljapurkar) とオーストラリアの死亡率に適用した研究 (Booth, Smith, and Maindonald) がとりわけ目を引いた。その一方で、アフリカでAIDSによる死亡が突如深刻になった現実に対処するためのモデル生命表的アプローチの必要性 (Heuveline) や、様々な外的要因を考慮した統合アプローチについての演題 (Hilderink) も推計のセッションで発表された。Lee and Carterの方法が様々なところで応用されているが、それはあくまでも過去の推移にもとづく予測の方法である。その方法自体にも探究すべき点があるし、外的要因を将来推計にどう取り入れるかといった大問題もある。そのためセッションの議論は非常に白熱し、後続のセッションが始まるまで熱気は冷めなかった。

また、大会期間中には、国連による世界人口の将来推計の2000年改訂についての説明会も開催された。全体としては出生率・死亡率ともに楽観的な見通しであるが、2050年の世界総人口は中位推計で93億人になり、それまでに日本をはじめ39ヶ国で人口が今日より減少していると推計されている。バングラデシュ、インド、ナイジェリアなどいくつかの国では出生率の低下がこれまでの見通しほど楽観的ではなくなっている。

(小松隆一記)